

# 暗黙裡の血液型性格観に関する研究

中 里 浩 明<sup>1</sup>

1. 婦由子は、友達に誘われて、ある大学との合コンに出かけて行った。スナック・ソフトドリンク・ソング・ゲーム……、にぎやかな輪のなかで、慣れない彼女はおとなしくしていた。隣りに座った男の子が彼女に向かって言った、「ああ、きみはB型か。よくもわるくも、マイペースってとこだな」。
2. 波留子は、ある女子大学の2回生である。定期試験のあと、監督者に「自分の右前のXさんがカンニングをしていました」と告げに行った。その行為を目撃したり、あとで聞いた級友たちは、いかにも波留子らしいなあと言いつつ、「だって、あのこはAB型じゃない」。
3. 那津子は、図書館のラウンジで、マドンナのフォトストーリーに没頭していた。授業のベルが鳴ったので、見ていた雑誌をあわてて元の棚に返したとき、間違った場所に置かれている雑誌が目について、それを正しい位置に直した。友達が感心したように言った、「あんたは純粹のA型ね」。
4. 亜季子は、硬式テニス部のレギュラーで、対外試合でも盛んに活躍していた。スポーツが大好きで、冬はスキー、夏は水泳……と、一年中まっ黒に日焼けしている。そんな彼女が司書の資格を取ろうとしたとき、口さがない仲間は即座に言った、「へえー、O型でもそんなことすんの、珍しいわね」。

近年、社会心理学、それも認知社会心理学と呼称されるに到った学科分野のなかには、ひとつの大きな研究の流れが見定められる。それは、Heider (1958) の現象学的な素朴心理学の影響下にある動向と言って、まずは差し支えないであろうが、外界や日常行動に対する一般人 (layperson) による解釈 (つまりは、implicit psychology, Wegner & Vallacher, 1977), 社会行動の日常的説明 (Antaki, 1981), 日常的理解 (Forgas, 1981), 等々のごとく、常識心理学の事柄内容に研究の関心が、殊更、集まって来ていることである。いわば、ごく普通の人々の心理世界、より適切には、社会的世界が、改めて正面から問題とされているのである。

とはいえ、情勢は徐々にその方向に歩みつつあるとはいいながらも、心的事象に関する専門家と一般人の興味の置き所の違いが、未だ存在していることも事実であろう。巷間で話題にされ、解明の期待されている事柄が、心理学の玄人たる専門家の取り扱う内容とは、必ずしも合致していないことが多々ある。たとえば、社会生活を営む人間間には、ごく普通に発生する感情である嫉妬なども、臨床畑の扱いは別にして、さほど積極的に取り上げられているようには見えない。

同様の事情は、本稿の主題である「血液型と性格の関係」についても該当するようだ。何にもまして、心理学の辞典・事典のなかに、この種の項目を容易に探し得ないのである。例外は、宮城（1982）の記述くらいであろうか。そこには、「血液型は……遺伝的気質と関連づけることが可能であるために、多くの人びとの関心の対象となったのであった。しかし、血液型と性格のあいだに直接関連のないことは……」（p.331）と、徹底して否定的に語られている。

更に、心理学の専門書にもまるで記載されていないようだ。但し、稀な例として、南（1983）は、「血液型によるタイプ分け……は、生理学的、心理学的には根拠がないが、現代の迷信といっていいくらい信じられている」と指摘し、続けて、「自分がA型であり、A型の性格はこうであると信じこむと、自己暗示がはたらいて、自分の性格をその類型にあてはめようとする。また他人から繰り返し君はA型だからそういう性格なんだといわれていると、自分でもそう思いこむようになる。その結果、自分の内的自我を知らず知らずのあいだにA型人間像に近づけてしまう」（p.115）と、なかなか示唆に富む見解を披瀝している。

かくのごとく、血液型（ABO式）と性格の関係は、心理学の専門家間では、等閑視というか、黙殺されているのが現状であろう。ところが、これとは対蹠的に、マスコミュニケーションの世界や、ごく普通の人々の日常世界では、両者の関係は肯定的に、濃淡の程度はあれ、当たり前のごとく受容されているかのようである。血液型に基づく自己や他者の性格判断、相性診断、しつけや親子関係の在り方など、記事や話題の範囲は極めて多岐にわたっている（たとえば、能見、1983；能見、1984参照）。殊に、女性向けの雑誌には、この種の情報が頻繁かつふんだんに盛り込まれている。また、最近では、求人広告に「B型人材を求む」とか、「O型のみOK」とか掲げられ、雇用の基準や人事異動の根拠や理由づけとしている企業のあることも耳目を引く。人生相談にも登場するし、更には、テレビ番組で再三扱われ、ブームに拍車をかけている。

こうして、信じる程度や信じ方、つまり、単なる遊びや話の接ぎ穂から、確実な判断材料としてに到るまで、受け止め方は深淺様々であろうが、日常世界では、血液型と性格との関係、「血液型人間学」は、言うなれば、常態化しているかのようである。ここまで来れば、社会心理現象と化していると言っても過言ではないであろう（この間の事情は、たとえば、森本、1985参照）。

かかる事態を見据えれば、遺伝学的・生物学的な根拠の欠落を指弾され（たとえば、中原・富家、1985）、また、心理学の大家によって明快に棄却されてはいるが、しかし、これはまさに見過ごせない問題であることも確かである。筆者は、血液型と性格が実際に（in reality）関係が有りや無しやを云々する資料を持ち合わせていない。飽くまで、認知上（in cognition）の関係を扱っていくに過ぎない。血液型と性格間に、少なくとも何らかの関係があるとする人々が、かなりの多数にのぼっているからには、その見解は、有力な暗黙裡の性格観（implicit personality theories）になっていると考え、この側面から、探索的な研究を企てることにしたのである。

暗黙裡の性格観そのものについての詳述は他に譲るが（たとえば、中里・Bond・白石、

1976 ; Schneider, Hastorf & Ellsworth, 1979), ここでは, 大橋 (1984) に従って, それは, 「市井の一般人が他者を理解するに際して, 暗黙のうちに依拠している素朴な信念の体系や判断枠組のことをさす」(p.59) と理解しておきたい。特定の文化圏に共通な, かつ, 個人ごとに独自なところもある, この暗黙裡の性格観を対人場面に持ち込んで, 個々の認知者は, 他者について得る情報を, それに照らして処理し, 何らかの判断を下し, 推論を遅くしているのである。

血液型に基づく暗黙裡の性格観を, ここでは, 次の4点から捉えていこうとする。①それは, どの程度まで, ステレオタイプ (先入見) となって, 個々人に所有されているのであろうか, ②行動の原因を帰属させるに当たって, それは, どの程度, 重要な手掛りとして利用されているのであろうか, ③そのプロトタイプらしさの水準は, 記憶材料の再生や印象形成のうえに, どの程度, 効果を及ぼすのであろうか, ④いったん, 他者の血液型を知ってしまうと, それは仮説や期待となって, 当該人物の種々の行動情報に直面したとき, 果たして, 注意や範疇化や統合などを方向づけるのであろうか。これらを扱うのではあるが, とはいえ, 本稿が, 試験的に, 手探りの企てに留まることは言うまでもない。

## 研究1: ステレオタイプ

### 目的

ステレオタイプ (stereotypes) は, 紋切り型とか固定観念と称され, 従来から, 通常, 偏見や差別といった否定的反応との関連で, 言及されてきたと看做して大過ないであろう。ところが, McCauley, Stitt & Segal (1980) は, こういう感情的な含意は捨象して, よりの確に述べれば, 拒否的な負荷を帯びさせることなく, この概念を, 一層ニュートラルな形で取り扱った。そして, 主観確率に基礎を置くベイジアン統計学 (たとえば, Phillips, 1973; 繁樹, 1985) を利用すれば, ステレオタイプに関する個人的な量的測度をも, 集団測度と併せて取得でき, 大いにメリットのあることを主張したのである。この点の詳細は, 既に, 別稿に記述してある (中里, 1982)。従って, ここでは, 暗黙裡の血液型性格観を, この流儀で分析しようとする際に, 最小限度必要な事項を述べるに留めたい。

**ベイジアン・モデル** Ajzen & Fishbein (1975) に依拠しつつ記述を進めるが, ベイズの定理もしくは法則は, 新しい情報に照らしての信念の変更を問題とする。それは, 規範的な (normative) モデルとして, 最適の (optimal) 確率変更を述べ立てる。即ち, 入手しうる情報が適正に利用されれば, 確率はいかに変化するかを指示するのである。

ベイズの定理は, 次のごとく書ける。

$$p(D|B) = \frac{p(D)p(B|D)}{p(B)} \quad (1)$$

ここで,  $p(D|B)$  は,  $B$  が与えられたときの  $D$  の条件つき確率 (この場合は, 即ち, 事後確率) であり, 別言すれば,  $B$  の生起を考慮して変更される  $D$  の確率のことである。 $p(D)$  なら

びに  $p(B)$  は、各々、事象  $D$  と、もうひとつの事象  $B$  の事前確率である。つまり、判断時点において、個人が有する事前の情報（仮説）のことである。 $p(B|D)$  は、 $D$  が与えられたときの  $B$  の条件つき確率であり、言うなれば、外部の世界から取得される情報（データ）のことである。

また、 $\bar{D}$ 、即ち、 $D$  の余事象 [ $p(\bar{D}) = 1 - p(D)$ ] を用いると、 $p(B) = p(D)p(B|D) + p(\bar{D})p(B|\bar{D})$  だから、ベイズの定理は、次のごとくも書ける。

$$p(D|B) = \frac{p(D)p(B|D)}{p(D)p(B|D) + p(\bar{D})p(B|\bar{D})} \quad (2)$$

この(2)式で、 $p(B|D) = p(B|\bar{D})$  のとき、 $p(D|B) = p(D)/p(D) + p(\bar{D})$  となる。 $p(D) + p(\bar{D}) = 1$  だから、 $p(D|B) = p(D)$  となり、事後確率と事前確率は等しくなってしまう、信念の変更は生起しないことになる。これに対して、 $p(B|D) - p(B|\bar{D}) > 0$  のときには、上向きの確率変更が期待でき、逆に、 $p(B|D) - p(B|\bar{D}) < 0$  のときには、下向きの変更が生じることであろう。だから、2つの条件つき確率、 $p(B|D)$  と  $p(B|\bar{D})$  の差が大きいくほど、現下の情報（データ）は事後確率に一層大きなインパクトを与える筈なのである。

このように、ベイズの定理は、事前確率と既知の条件つき確率から事後確率を求めるための公式と看做され、新しい情報に照らしての信念の最適変更（optimal revision）を明細に述べ立てるのである。それ故、規範的なモデルなのであるが、と同時に、それは、人間の情報処理のかなり適切な記述モデル（descriptive model）でもあることが、種々のリサーチによって着実に示されてきている。

具体例をまじえて進めていこう。事象  $B$  が生起したときの事象  $D$  の確率（即ち、事後確率）は、 $D$  の事前確率に、 $D$  が生起したときの  $B$  の確率を乗じ、これを、 $B$  の確率で除したものであった [ $p(D|B) = p(D)p(B|D)/p(B)$ ]。血液型による特性予測において、 $B$  (blood type) を「AB 型」、 $D$  (disposition) を「クールな」という性格特性とする。そして、ベイズの定理を適用すれば、 $p(\text{クールな}|\text{AB 型}) = p(\text{クールな}) p(\text{AB 型}|\text{クールな})/p(\text{AB 型})$  となる。言い換えれば、AB 型の人々のうちでクールな者の占める割合は、日本人<sup>2</sup>のうちでクールな者の占める割合に、クールな人々のうちで AB 型の占める割合を掛け、これを、日本人のうちで AB 型の占める割合で割ったものに等しいのである。

さて、 $p(B|D)/p(B)$  を  $LR$  (likelihood ratio, 文度比) と示せば、 $p(D|B) = p(D)LR$  のごとく、 $B$  が生起したときの  $D$  の確率は、この  $LR$  の大きさ如何によって、 $D$  の事前確率と異なってくることが明瞭である。 $LR$  は別名“標徴比” (diagnostic ratio) と呼ばれ、事象  $B$  の生起が事象  $D$  の確率を変更する程度を表わしている。換言すれば、ベイズ・モデルに従うと、ある信念もしくは仮説の変化量は、新しい情報項の標徴値（即ち、文度比）の関数なのである。かくて、 $LR$  が 1 の場合には、 $B$  の生起は  $D$  の確率に何らの影響も差しはさまない。つまり、 $B$  は標徴的価値を全く有しないのである。

同様に、 $p(B|D) = p(B)p(D|B)/p(D) = p(B)LR$  となる。この際は、 $p(D|B)/p(D)$  が標徴比であり、事象  $D$  の生起が事象  $B$  の確率を変更する程度の測度ということになる。

事実は、 $p(B|D)/p(B)=p(D|B)/p(D)=LR$  となり、事象  $B$  の確率に対する事象  $D$  の標徴値は、事象  $D$  の確率に対して事象  $B$  が持つ標徴値と同一である。

ところで、標徴比、たとえば、 $p(\text{クールな}|AB \text{ 型})/p(\text{クールな})$  が、即ち、ステレオタイプの測度である。集団所属に関する情報が、ある性格特性の確率を変更する程度を、それは表わしている。また、特定の集団（血液型）が、日本中の他の全ての人々と異なっている特性の測度でもある。この標徴比の数値が、1 より大または小の場合には、ステレオタイプの存在を指示し、基準値（ベースライン）からの乖離の程度が、ステレオタイプの強度を示すのである。上述の、「クールな」の例は、まさしくステレオタイプの的であろうし、特性を「楽天的な」に置き換えれば、これまた、逆の、マイナス方向に特異なステレオタイプを表示することになるであろう。

このように、ベジアン確率の直接推定値、ベジアン標徴比の指標を利用して、暗黙裡の血液型性格観を、ここでの意味におけるステレオタイプとして捉えていこうというのが、研究 1 のささやかな目的である。

## 方法

**被験者** 心理学に関する基礎的演習を履修している女子学生32名。

**刺激材料と質問紙** 血液型ステレオタイプの刺激対象として、ここでは、「O 型」を選択した。日本人にも比較的数多く（約 3 割）見られるからである。次に、広く流布している血液型と性格に関する文献（煩雑なため若干を挙げると、能見, 1981; 能見, 1983—4）を参照するとともに、女子大生の頭中に実際に存在するイメージを探る調査研究（中里, 未発表資料, 1984）<sup>3</sup>の結果を踏まえて、この O 型に特徴的な性格特性を選定していった。こうして、「おおらかな」、「自己主張の強い」、「バイタリティーあふれる」、「順応性のある」、「親分（姐御）肌の」という 5 個のステレオタイプ特性と、「まわりに気を配る」、「二重人格の」、「マイペースの」、「きちょうめんな」、「型にはまらない」という、非 O 型的な社会的ステレオタイプだと思われた 5 個の特性を選び抜き、都合 10 個の形容詞をランダム・リスティングしたのである。

そうして、各々の特性（たとえば、おおらかな）に対して、被験者個々人に、次に示すベジアン統計学における 3 種の確率を推定するように求めた。即ち、(1)「日本人のうちで、おおらかな者の占める割合は」、 $p(\text{特性})$  であり、これは事前確率もしくはベースレートと呼ばれる。(2)「おおらかな人々のうちで、O 型の占める割合は」、 $p(\text{O 型}|\text{特性})$  であり、これは、時として、レプリゼンタティブネスと呼ばれる。(3)「O 型のうちで、おおらかな者の占める割合は」、 $p(\text{特性}|\text{O 型})$  であり、これは事後確率と呼ばれる。加えて、(4)「日本人のうちで、O 型の占める割合は」、 $p(\text{O 型})$  を含めて、併せて 4 つの主観確率をパーセントで記すように、被験者に求めたのである。その際、それぞれの確率推定は頁を異にして行って貰った。最後に、(5)「次の 10 の特性を、O 型に典型的だと思われる順にランク付けして下さい（1 位から 10 位まで）」と称して、同一刺激特性の順位づけをして貰った。この指標は、ステレオタイプのチ

エックリスト法を代用するもので、ここに付加しておいたのである。

**手続** 使用した質問紙は、表紙を含めて、確率推定と順位づけの、計6頁から構成されていた。順序効果を減殺するために、刺激材料の配列は系統的に異なるようにして、この小冊子を被験者に手渡した。それから、「計量的予測」に関するリサーチである旨の教示をし、記入漏れなきように注意を促したのち、回答をして貰った。所要時間は約8分であった。

## 結果と考察

表1の左端に、リサーチに実施したO型ステレオタイプ特性と、非ステレオタイプと思われた特性を、各々5個ずつ掲げる。続く2列から4列までは、これら10個の性格特性に対する被験者の判断（パーセント）の平均値である。順に、 $p(\text{特性})$ 、つまりは事前確率またはベースレート、 $p(\text{O型}|\text{特性})$ 、つまりはレプリゼンタティブネス、 $p(\text{特性}|\text{O型})$ 、つまりは事後確率または特性予測である。そして、5列には $p(\text{特性})p(\text{O型}|\text{特性})/p(\text{O型})$ を、集団平均値を用いて、特性ごとに計算した数値を掲げる。なお、 $p(\text{O型})$ の判断平均値は、27.7%であった。こうして、計算によって得られた予測の数値（5列）と、実際の判断による予測の数値（4列）とのあいだに、積率相関係数を算出してみると、 $r=.60(p<.10, n=10)$ となった。かなり高い相関ではあるが、以前に、アメリカ人に対するステレオタイプを研究したときに得られた極めて高い相関（ $r=.99$ , 中里, 1982）と比較すれば、相対的に低率であるのは否めない。いかなる事情によるものであろうか<sup>4</sup>。

それはともかくとして、表1の6列こそは標徴比、即ち、 $p(\text{特性}|\text{O型})$ 平均を $p(\text{特性})$ 平均で除したもので、ここで言うステレオタイプの測度である。基準値の1が非ステレオタイプ特性を表示し、それ以上の数値を持つ特性が、人々一般、ここでは日本人全体のなかで、O型の人物により該当する蓋然性の大きな特性であり、それ以下の数値の特性は、逆に、O型の人物にとって蓋然性の小さな、特徴的でないものであることを意味する。表を見ると、「おおらかな」(1.72), 「バイタリティーあふれる」(1.43), 「型にはまらない」(1.97), 「親分(姐御)肌の」(1.78)の性格特性が、正のステレオタイプであり、逆に、「まわりに気を配る」(.71), 「二重人格の」(.64), 「きちょうめんな」(.61)の特性が、負の、つまりは、O型に特徴的ではないステレオタイプだと出ている。

ここで、表1の4列、 $p(\text{特性}|\text{O型})$ を眺めよう。この指標も、従来から、集団内確率とい

表1. ステレオタイプ・アナリシス

	判断された $p(\text{特性})$	判断された $p(\text{O型} \text{特性})$	判断された $p(\text{特性} \text{O型})$	計算された $p(\text{特性} \text{O型})$	標徴比 LR
おおらかな☆	37.3	51.9	64.3	69.9	1.72
まわりに気を配る	58.0	31.5	41.0	66.0	.71
自己主張の強い☆	39.9	36.9	43.8	53.2	1.10
二重人格の	47.6	22.7	30.4	39.0	.64
バイタリティーあふれる☆	40.0	43.4	57.0	62.7	1.43
マイペースの	41.0	42.0	49.1	62.2	1.20
きちょうめんな	53.3	23.6	32.6	45.4	.61
順応性のある☆	51.7	44.4	56.9	82.9	1.10
型にはまらない	26.2	41.6	51.7	39.3	1.97
親分(姐御)肌の☆	29.2	46.3	52.1	48.8	1.78

註.  $p(\text{O型})=27.7$ , ☆はO型ステレオタイプ特性。

うステレオタイプの測度である。「おおらかな」(64.3%),「バイタリティーあふれる」(57.0%),「順応性のある」(56.9%),「型にはまらない」(51.7%),「親分(姐御)肌の」(52.1%)といった性格特性が、O型のステレオタイプ特性として挙げられている。先程の標徴比測度と較べれば、大体同様の傾向が見受けられる。但し、この指標でも、当初ステレオタイプのとは想定していなかった「型にはまらない」という特性が、やはり、相当高い値を示している。解釈するに、「型にはまらない」は、型破りの、大胆なというイメージと重なったり、形式的でなく、柔軟なに通じると捉えられたり、対照するにA型的ではなさそうだ、等々と受け止められたのではあるまいか。

この点を明瞭にするために、典型性のランク付け測度を見てみよう。トップのO型特性とされているのは、「おおらかな」( $M=2.19$ )であり、「バイタリティーあふれる」( $M=4.16$ ),「順応性のある」( $M=4.56$ ),「型にはまらない」( $M=5.06$ )という特性が、これを追って続いている<sup>5</sup>。標徴比測度を始め、3種類の測度を通じて、「型にはまらない」という特性は、当該女性被験者によって、かなりO型的なニュアンスを含むと見られていたようである。

手始めの、このリサーチによって明らかにされた事柄で重要なのは、暗黙裡の血液型性格観を、ステレオタイプとして捉えることができることであり、但し、民族的ステレオタイプほどには、確固として人口に膾炙しているとは言いがたいという、この点であろう。

## 研究2：アトリビューション

### 目的

今日、人間行動の原因を何らかの要因に帰すること、即ち、帰属過程(attributitional processes)に関する理論やリサーチには種々のものがあり、というよりも、甚だしく多岐にわたっている。ここで問題としようとしているのは、そのほんの一部、帰属過程のベイジアン・アナリシスについてである(たとえば、Ajzen & Fishbein, 1975; Trope & Burnstein, 1975)。

個々人は、自らの性格や態度や関心などの内的な要因に衝き動かされて行動する場合もあれば、まわりの重要な他者の要請や期待、全体社会の文化規範といった外的な要因に則って、行動を取る場合もあろう。そして、行為者は、何らかの結果ないし効果を生じさせるべく行動しているのであり、一方、観察者の側は、とにかく、ありふれていない、ユニークな効果に着眼し、そこに行動の原因を求める傾きを持つ。しかも、その際には、確信を持って推論を下し得るのである(Jones & Davis, 1965)。より突っ込んで述べれば、観察者は、行為者の置かれた行動決定状況を見定め、決定の過程を再構成しようと試みるであろうし、行為者の行動を十分に説明づけようとして、全ての行動選択肢に係わる共通な要素ではなく、当該行動に特異に結合する要素を探し求め、それをして帰因の根拠とする傾向を有している、と看做して良いであろう(Ajzen & Holmes, 1976)。こうして、行動の原因帰属(causal attribution)を、ベイズの定理と斉合する確率論的情報処理の観点から、考察していこうとの企てがなされるに到る。

**ベイジアン・モデル** ベイズの定理を原因帰属に適用してみる。(1)式を再掲する。

$$p(D|B) = \frac{p(D)p(B|D)}{p(B)} \quad (1)$$

ここで、 $p(D)$ は、行為者がある属性（disposition）を持つことに関する観察者の事前確率、 $p(B)$ は、行為者がある行動（behavior）を遂行することに関する観察者の事前確率、 $p(B|D)$ は、属性  $D$  を持つとの条件下で、行為者が行動  $B$  を遂行することに関する観察者の確率（ $B$  に関する  $D$  の文度、既知の条件つき確率）、 $p(D|B)$ は、行動  $B$  を遂行したとの条件下で、行為者が属性  $D$  を持つことに関する観察者の確率（ $D$  に関する事後確率）である。

さて、ある事象、単一の属性  $D$  のほかに、その余事象、つまり、 $D$  以外の全ての属性  $\bar{D}$ （即ち、 $p(\bar{D}) = 1 - p(D)$ ）を考慮することにしよう。 $\bar{D}$  に関して、ベイズの定理は、 $p(\bar{D}|B) = p(\bar{D})p(B|\bar{D})/p(B)$  のごとく書ける。先程の  $D$  の式（1式）を、この  $\bar{D}$  の式で割れば、次の式が得られる。

$$\frac{p(D|B)}{p(\bar{D}|B)} = \frac{p(D)p(B|D)}{p(\bar{D})p(B|\bar{D})} \quad (3)$$

ここで、 $p(D|B)/p(\bar{D}|B)$ は、属性  $D$  に関する事後の見込み比（posterior odds）であり、行為者の行動  $B$  を観察したのち、属性  $D$  が、他の諸々の属性  $\bar{D}$  よりも、観察者によって、件の行為者に帰属されるであろう、その程度を表示する。同様に、 $p(D)/p(\bar{D})$ は、属性  $D$  に関する事前の見込み比（prior odds）である。最後に、 $p(B|D)/p(B|\bar{D})$ は文度比（likelihood ratio,  $LR$ ）のことで、当該行動（情報）の標徴値（diagnostic value）の指標である。即ち、それは、行動  $B$  が属性  $D$  を、その余事象である属性  $\bar{D}$  に比して、支持する（favor）程度を表わしている。

ところで、(3)式は、次のごとく、より単純に書くことができる。

$$\Omega_1 = \Omega_0 LR \quad (4)$$

ここで、 $\Omega_1$  は事後の見込み比、 $\Omega_0$  は事前の見込み比、 $LR$  は文度比を表わす。 $LR$  は、2つの条件つき確率、 $p(B|D)$  と  $p(B|\bar{D})$  とから構成されている。これら2つの確率が等しいとき、 $LR=1$  となり、従って、 $\Omega_1 = \Omega_0$  で、事前の見込み比から事後の見込み比へは、何らの変更も生起しない。即ち、この場合、行為者の行動は、当人に付与された属性に全く効果を有しないのである。もし、 $p(B|D) > p(B|\bar{D})$  ならば、 $LR > 1$  となり、見込み比は属性  $D$  を支持して変更される。逆に、 $p(B|D) < p(B|\bar{D})$  ならば、 $LR < 1$  となり、見込み比は属性  $\bar{D}$  を支持して変更されるのである。

Ajzen & Fishbein (1975) によれば、原因帰属はベイズの定理の文度比（標徴比）に対応する。文度比の値が高くなるほど、観察者が、行為者の行動を特定の属性  $D$ （他の諸属性  $\bar{D}$  ではなく）に依拠するとますます信じる筈である。それと並んで、事前の見込み比から事後の見込み比への変更もまた文度比の関数であり、従って、原因帰属に対応しているのである。この点は、ベイズの定理の対数形式： $\log LR = \log \Omega_1 - \log \Omega_0$  を見れば明瞭に納得できる。

というところで、主題と取り組まなければなるまい。観察者は、行為者の行動のユニークな



効果に着眼し、そこに行動の原因を帰する傾向がある。かかる非共通的な効果が発見できれば、観察者の推論は、確信度を強めることができるということであった。Ajzen & Holmes (1976)によれば、特定の属性への原因帰属は、属性に関する確率や見込み比の変更と同様、行動効果のユニークさとともに増大するであろう。行為者の行動をユニークな効果に結びつけることができれば、そのことは、対応する特定の内的属性を一層標徴することに繋がるであろう。つまり、結合がユニークであるほど、尺度比は高くなる筈だからである。

具体例を挙げよう。導入部の例2，女子大生の波留子——試験でカンニングしていたXさんのことを監督者に告げた彼女の行動を、級友たちは口々に噂しあつた、あの事例を取り上げる。ここで、属性  $D$  は、彼女の特徴として AB 型をあげる級友たちの意図を指し、行動  $B$  は、AB 型を含む種々の特徴からなるセット  $Q$  を選択することを表わすものとする。そして、まず、諸セット群のなかで、セット  $Q$  にのみ AB 型がユニークに結合している場合を想定しよう。すると、彼女の特徴として、級友たちが AB 型を是非とも指摘したいと意図しているならば、彼等がセット  $Q$  を選択するであろう確率、即ち、 $p(B|D)$  は、相対的に高いと予測される。逆に、級友たちが AB 型をあげたくないならば、セット  $Q$  が選択される確率、即ち、 $p(B|\bar{D})$  は、相対的に低い筈である。この場合、尺度比  $p(B|D)/p(B|\bar{D})$  は、極めて高い値を示すことであろう。これに対して、AB 型が全ての選択肢セットに共通して含まれている場合には、彼女の特徴として、級友たちがセット  $Q$  を選択する可能性は、AB 型をあげる意図如何に拘わらず、同一である筈だ。このときには、尺度比は 1 に限りなく近づくことであろう。

このように、暗黙裡の血液型性格観を、行動効果のユニークさと属性帰属の関係という観点から捉えていこうというのが、研究2のささやかな目的である。

## 方法

**被験者** 研究1と同じ女子学生32名。

**刺激材料と質問紙** 呈示のために用意した状況は2種類だが<sup>6</sup>、以下、仮想人物、波留子の事例をもとに述べていくことにする。状況記述文に続いて、小冊子の同頁に、次の設問を付した。

(1)この状況で、級友たちが、波留子の特徴として、AB 型をあげる意図を持っている可能性は、100のうち( )である。

これは、仮説的な選択状況に直面させるに先立って、被験者に、属性に関する事前の主観確率  $[p(D)]$  の測度に反応して貰ったのである。

こうして、2つの状況についての事前確率の記入のうち、観察者の立場にある被験者に、行為者(つまりは、級友たち)の選択状況を呈示した。

(選択状況)この時点で、級友たちの前に、波留子の特徴を述べた次の4つのセットが示され、最も該当するセットを選択するように求められたとします。

セットA：勉強家、正義漢、ひょうきん族、辰年

セットB：山羊座、勉強家、世間知らず、AB 型

セットC：世間知らず、辰年、山羊座、勉強家

セットD：辰年、ひょうきん族、世間知らず、正義漢

ここに掲げたのは、4種類のセット群のうちのひとつ、基準属性（この事例では、AB型）が1セット（選択肢）のみに含まれているユニーク条件である。他に、基準属性が4セットのなかに2・3・4個ずつ含まれている種々の共通条件も作成してあった。被験者に選択状況の熟読を求め、そののち、次のごとく、行為者のセット選択行動を開示した。

級友たちは、セットBを選択することに決定しました。

このあと、2種類の状況ごとに、まとめて4つの設問が続いていた。

(2)このセットB選択を見て、あなたは、級友たちが、波留子の特徴としてAB型をあげる意図をどのくらい持っていると思いますか。その可能性は、100のうち（ ）である。

これは、属性に関する事後の主観確率 [ $p(D|B)$ ] の測度への反応を求めたのである。その次には、文度比を構成する2つの条件つき確率の測度が続いていた。

(3)波留子の特徴として、AB型をあげる意図を持っている [(4)……持っていない] 級友100名のうちで、

セットAを選択する割合は（ ）であり、

セットBを選択する割合は（ ）であり、

セットCを選択する割合は（ ）であり、

セットDを選択する割合は（ ）である。

合計100

そして、行為者によって既に選ばれていた選択肢（この事例では、セットB）に対する、被験者の反応確率が、各々、 $p(B|D)$ と $p(B|\bar{D})$ の測度となった。最後に、原因（属性）帰属の直接的な推定を求める設問を置いた。

(5)級友たちは、波留子の特徴としてAB型をあげる意図を持つがゆえに、セットBを選択したのだと思いますか。その可能性は、100のうち（ ）である。

**手続** 他者の態度や意図や関心を、どのくらい正確に認知することができるかに関するリサーチであると説明して、表紙を含めて10頁の小冊子を被験者に配布した。集団事態で回答をして貰ったが、所要時間は約7分であった。

## 結果と考察

表2として、原因（属性）帰属に関する主要な発見結果を掲げる。左端には、種々の測度（変数）を、続く4列には、ユニークさ条件の違いごとの反応の平均値を示す。なお、状況には2種類あったが、この表に示したデータは、それらを込みにしたものである<sup>7</sup>。

第1行（first row）には、行為者が直面した選択状況や、決定の結果を知るに先立って、観察者としての被験者に求めた属性帰属の事前確率 [ $p(D)$ ] の平均値が並んでいる。この事前確率に、ユニークさ条件ごとの差異は認められない [ $F(3, 60) = 1.25, ns$ ]。

第2行に移ると、差異は明瞭になってくる。文度比（LR）に及ぼすユニークさ条件の効果を見ると、傾向として、基準属性（この事例では、AB型）が、行為者によって選ばれたのだ

と示された選択肢とユニークに結合して  
 いるほど、数値は高く上がっている [ $F$   
 (3, 60)=3.79,  $p<.05$ ]。基準属性が4  
 つの選択肢のセット全てに含まれている  
 共通条件での平均尺度比 ( $LR = 1.20$ )  
 と、それが唯一の選択肢のセットにしか  
 含まれていないユニーク条件の平均尺度  
 比 ( $LR=5.33$ ) とのあいだに、画然とし

表2. アトリビューション・アナリシス

変 数	ユニークさの程度☆				$F$
	1	2	3	4	
$p(D)$	.29	.27	.20	.29	1.25
$LR$	5.33	2.72	2.64	1.20	3.79*
$CA$	.51	.39	.44	.29	2.98*
$p(D B)$	.44	.34	.39	.32	1.07
$p(D B)-p(D)$	.15	.07	.19	.04	2.89*

註: ☆は基準属性を分有しているセット(選択肢)の数。

\*は  $p<.05$ 。

た差異のあることは明白である (Newman-Keuls test,  $p<.05$ )。

前述のごとく、行動の原因帰属は、バイズの定理の尺度比 (標徴比) に対応するのであれば、尺度比にかくのごとき差異が認められるのであるから、当然のこと、原因帰属の直接推定 ( $CA$ ) にも、同様の傾向がうかがえる筈である。第3行を見ると、概して、この期待が裏付けられている [ $F(3, 60)=2.98$ ,  $p<.05$ ]。原因帰属は、ユニークさの程度に応じて、判然とした形で実施されているようである。

行為者の選択行動の実際を目撃したあとで、当の人物が関連した属性を有している可能性 [ $p(D|B)$ ] は、これまた、選択状況のユニークさの深まりと共に増大していくと推測される。第4行を見ると、しかしながら、傾向としてはそう受け取れなくもないが、有意水準に達しなかったために [ $F(3, 60)=1.60$ ,  $ns$ ]、深追いは避けるのが賢明であろう。

最後の第5行には、属性に関する事前確率と事後確率の差、つまりは、変更の程度の測度 [ $p(D|B)-p(D)$ ] が示されている。ユニークさの違う条件ごとくの変化量は、統計的には有意ではあったが [ $F(3, 60)=2.89$ ,  $p<.05$ ]、傾向がすっきりせず、断定的なことを語るのが躊躇される。

さて、観察者が、行為者の行動を説明づける、その拠って来たとを跡づけようとするとき、行為者本人のなかに、また、環境条件のなかに、何らかの明瞭な手掛りを探し求めようとするであろう。手掛りが複数で曖昧な場合よりも、唯一しかないように見える場合のほうが、その手掛りに基づいた推論や帰属は、確信を帯びている筈である。このような、行動効果のユニークさが行為者の内的属性の帰属に及ぼす影響の大きさが、研究2のリサーチで、かなり明らかになったと言い得よう。

いまま少し、暗黙のうちに人々が抱いている性格観に即して述べていくことにしよう。波留子の事例では、仮想人物一波留子・行為者一級友たち・観察者一被験者、という構図になっていた。そして、各々の選択肢 (セット) のなかに、行為者が直面し、また、行為者の選択的決定行動を、被験者が、それを手掛りに説明づけるであろう属性は、4種類ずつ組み合わせられて含まれていた。他の3つの選択肢 (セット) ではなく、それらと比較対照したすえ、特定のセットを、仮想人物を特徴づけるものとして選んだ行為者の行動には、観察者という立場の被験者から見ても、種々の理由が考えられ、ここに取り上げたユニークさの程度は、そのひとつに過ぎないではあろう。たとえば、組み合わせられた諸属性の内容如何も、相当のインパクトを、説

明づけに与え得た筈であることは否定できない。

とはいうものの、行為者も、また、観察者も、諸属性のなかから、顕出的な (salient) 属性を抜き出し、それでもって、人間の行動を単純化し、強調化して秩序づけ、理解していきたいという強い動機づけを持っているように推察される。たとえば、同じ辰年生まれの級友たちにとっては、波留子の一見特異な行動を、辰年という干支には端から帰因できないし、山羊座の親友がいるが、そんな行動は取りそうもないし、勉強家や正義漢にしても、必ずしもそうするとは限らないし……、と削除の規則をまず適用し、そうこうしているうちに、あるいは、目星をつけていた最も適切そうな属性 (この事例では、AB 型) が見出せれば、これに、一段と重みをあずけ、その説明づけで納得し、もって、心理的な安定化を図る、という筋道が充分に考えられるのである。

### 研究 3：プロトタイプ

#### 目的

これまでも触れたごとく、我々は、他の人々を何らかの性格型範疇へと分類しようと試みる。分類の方針や基準には個人差が見られるが、しかし、判断が、性格についての既存の概念に導かれることに間違いはない。この、認知者が人々一般について抱く既存の概念が、即ち暗黙裡の性格観であり、個々人は、こういう認知構造を活用して、社会的環境からの膨大な刺激を適切に処理していつているのである。従って、特定の他者に遭遇したとき、その人物の諸特徴を、あるがままに全部受容して、対人判断を行うというわけでないことは言うまでもない。認知者の側の既存の概念と、当該人物の刺激特徴との相互作用 (interaction) が、そこには存在するのである。前者を後者に当てはめていく、合致させていくという道筋がすぐ浮かぶけれども、後者によって前者が活性化されるということも考えられよう。

Cantor & Mischel (1979 a) に従えば、我々は、充分に構造化された安定した表象を、記憶のなかに貯えており、それらの表象は、相異なる様々な性格型と結びついた諸属性を含んでいる。こうした性格の原型 (personality prototypes) は、特定の性格型に関して抽象された表象と言え、個々の他者にまつわる情報を、それに照らして、対応させ評価するための基準 (standards) の役目を果たすのである。それがために、特定のプロトタイプに係わる属性には、特徴的な性格特性、遂行されるであろう行動、その種の人物とよく結びつけられる状況、そういった情報が含まれている筈である。そして、入力情報が、これらの基準情報と全般的に類似性の高いものである場合、認知者は、当の刺激人物はその性格範疇型の典型だ (prototypical) と、確信を持って識別することであろう。更に進んで、既存の一般的な範疇プロトタイプを活用して、当該人物についての情報や知識を、どんどん飾り立て、彫琢し、推論を逞しくする、そういうことも行うであろう。

それでは、ある性格範疇に典型的だと看做されるための、基準との適合について、突っ込んで見てみよう。これには、族類似 (family resemblances, Anderson, 1980 参照)<sup>8</sup> の概念が適用される。当該範疇に属する他の構成員と共通の要素を多く持ち合わせ、かつ、関連する範疇の構

成員とのあいだには、殆ど分有する要素を欠いている場合が、その条件に適うのである。従って、たとえば、外向性や内向性に関して、ある個人が持つプロトタイプ、いわば、諸々の素性のセットを、記憶のなかから喚び起こし、現に直面している他者の属性が、各々のプロトタイプにどれだけマッチしているかを吟味する。そして、これらプロトタイプとの全般的な類似性如何に応じて、典型性 (prototypicality) の程度が定められることになる。この典型性の程度が大であるほど、当の人物についての情報は、より容易に処理されることであろう。

そうだとすれば、刺激情報の典型性の程度に変異を持たせるならば、情報処理の過程に、それに応じた効果が生じてくると仮定される。あるひとつのプロトタイプに関連する特性や行動記述のみで呈示される、極めて斉合的な刺激人物を、「純粋な」(pure) 人物と表現しよう。これを、矛盾はしないであろう、ニュートラルな行動記述を含んで示される「混合の」(mixed) 刺激人物や、相矛盾するであろうプロトタイプ属性を含んで構成される、「不斉合の」(inconsistent) 刺激人物と比較するならば、その間に、大きな懸隔の生じることが充分に予測できる。刺激情報の再生 (recall) を求めると、全体としての、また、正確な記述量に違いが明らかであろうし、更に進んで、性格の印象形成を求めるならば、経験によって取得した知識を利用しての、刺激人物の潤色には、相当の開きが出現するものと想定される。

そこで、暗黙裡の血液型性格観を、一組のプロトタイプとして捉え、典型性に種々変異を持たせることによって、情報の再生や印象形成のうえに、どんな効果が生じるかを検討していこうというのが、研究3のささやかな目的である。

## 方法

**被験者** 心理学に関する基礎的演習を履修している女子学生30名。

**刺激材料と質問紙** 対象となる刺激人物の行動を記述する文を作成しにかかった訳だが、血液型には4類型(A・B・O・AB)があり、そして、前述の、一貫性の効果を探るための3水準(純粋・混合・不斉合)を置くとすれば、それらを組み合わせて、少なくとも12種類の人物が必要になる。これに加えて、だれにでも当てはまりそうな行動を取る、血液型に関して中性的な人物(N)を含め、計13名の刺激人物を設定することにした。血液型に関連する行動記述文は、従前どおりの文献(能見, 1981; 能見, 1983—4)を参考に作成していったのであるが、その際に、Cantor & Mischel (1979 a) に倣って、身近かな場所と人物を盛り込むことによって、記述内容を明確なものにしようと企てた。

各々の刺激人物を表現するためには、6つの、様々な文脈における行動記述文を使用した。まず、「純粋な」人物は、その6文が全て当該の血液型に典型的な行動に属するものであり、「混合の」人物は、4文が当の血液型に関係し、あとの2文が中性的な人物記述の項目でまとめ、最後に、「不斉合な」人物は、4文が何らかの血液型にまつわり、残りの2文は、他の血液型の項目を適宜組み込んでおいた。なお、典型性の程度は、大体、均一水準であるように心掛けた。また、記述文の配列順序は無作為であったが、同種のものが並ばないように配慮した。こうして、1頁に1名の刺激人物を配し、想起を容易にするためと考えて、女子学生の白黒写真(5.5×4 cm)と、ごく一般的な名前を、記述文リストの上方に並べて置いたのである。

たとえば、「純粹の」A型は――

- (A)春子は、梅田の紀伊国屋前でボーイフレンドと待ち合わせていたので、きっちり約束の時間に行った
- (A)春子は、テニスの試合で失敗して、なぜ失敗したのか……と自分を責めた
- (A)春子は、ファッションはベーシックなものが好きだった
- (A)春子は、授業中、まわりがうるさいと先生に悪いと思ったが、何も言わなかった
- (A)春子は、クラブのミーティングでみんなの意見に賛成した
- (A)春子は、会社訪問をした時、出しゃばらぬよう気をつかった

また、「混合の」A型は――

- (A)夏江は、家庭教師先で、子供が理解するまできっちりと完璧に教えようと努力した
- (A)夏江は、電車の中で痴漢にあったが、下を向いてじっと我慢していた
- (N)夏江は、今年も京大アルペンのツアーに行って楽しかった
- (A)夏江は、コンサートにひとりで行って静かに聴いていた
- (N)夏江は、図書館で本の貸し出しのことで係の人に問い合わせた
- (A)夏江は、カフェバーに行った時、ウェイトレスが運びやすいように、後かたづけをして店を出た

更に、「不斉合の」A型は――

- (A)秋代は、図書館の本の貸し出しのことで係の人と意見が食い違ったが、言いたい事は心にしまって黙っていた
- (B)秋代は、クラブでは、先輩、後輩にとらわれず誰とでも仲よくした
- (A)秋代は、家庭教師先で、子供が理解するまできっちりと完璧に教えようと努力した
- (O)秋代は、電車の中で痴漢にあったが、「何すんのよ」と大声をあげた
- (A)秋代は、ショッピングに出かけて、ブラウスを慎重に品定めして買った
- (A)秋代は、スキーに行く時、ツアーに参加してスケジュールどおり過ごした

このほかに、B型的記述としては、授業の興味のある部分だけを熱心に聴いた、ファッションはその時の感覚で着いたものを着た、などがあり、O型的記述としては、スキーに行つて、バスで一緒だった別のグループと仲よくなった、梅田の紀伊国屋前でボーイフレンドと待ち合わせをしていたが、遅れそうになってバタバタ走っていった、などがあり、AB型的記述としては、クラブのメンバーとは、学外では一步距離をおいてつきあっていた、会社訪問をした時、面接をソツなく無難にこなした、などの項目を用意した。このような項目を作成するのに充分慎重を期したが、設定した状況における血液型別の行動を考案するのに、なかなか苦勞したことも事実である。作成した項目数を示すと、A・B・O・AB型的行動記述は13個ずつ、中性的（N型的）な行動記述は6個であり、これらを適当に組み合わせて、13名の刺激人物を用意したのである。

**手続** 刺激人物の総数が聊か多く、被験者に、行動記述文の保持と印象形成を、全てにわたって求めることは、少なからず困難なのではないかと考えられた。そこで、30名の被験者を2

分割し、6名の基準刺激人物に加えて、1名の中性的な人物、併せて、7名についての判断をして貰うことにした。この中性的な人物は、両被験者群を通して、共通の内容で構成し、当該刺激人物についての判断に、両群間で差異がなければ、資料を合体し、以後の分析を進めようと意図したのである。

調査票（質問紙）は、刺激となる材料の部分と記入用紙の部分の、2部の小冊子から組成されていた。刺激材料の小冊子の前頁に当たるところで、「基礎資料の収集」という名目の下に、4つの血液型別の性格や行動の顕著な特徴を記述して貰った。これは、主題への動機づけをそれとなく促す狙いがあった。続く、小冊子の表紙には、「これから、7人の人物について、それぞれの写真と、その名前と、ある状況における行動を記述したものを読んで貰います。……各々の人物について、特徴的な性格の印象を作って、写真と名前を関連づけてしっかり記憶して下さい」という教示を付け、口頭でも説明した。そして、各々の刺激人物についての記述文章は、2回ずつ、60秒と30秒間、合図によって時間を区切り読んで貰ったのである。

こうして、約10分間の熟読作業のうち、刺激材料の小冊子は回収し、替わって、記入用紙の小冊子を配布した。表紙には、A. 再生として、「7人の人物についての記述で、記憶している事柄をできるだけ元の言葉どおり、正確に書いて下さい」、B. 印象として、「それぞれの人物についての印象を、……写真を考慮しないで、前に読んだ文章から受ける印象のみを書いて下さい」との教示を記し、この点を、説明においても強調した。次頁からは7枚、各々の刺激人物の写真と名前を掲げ、その下方に、再生と印象についての記入を求める用紙が続いていた。各人物につき3分間ずつ作業をおこなって貰い、補足時間を2分間とったのち、最後の頁に付した「人物の印象を作る時に血液型は何かと考えますか」という設問と、7人の刺激人物それぞれの血液型の推定という設問に回答して貰ったのである。提示順序は一定であり、回答に要した時間は約25分であった。

## 結果と考察

操作のチェック：刺激人物の多数さ故に、被験者を2群に分け判断を求めたので、両群に共通の中性的な刺激人物に対する判断に差異がないかを、まず検討することにした。正確な再生数の指標を見ると、 $M_1=2.53$ と $M_2=2.87$ であり、この間に有意差は見出し得なかった [ $t(28)=0.55$ ,  $p<.001$ ]。従って、両群は同一母集団に属すと看做して差し支えないと考えられたため、以後、資料を合体して分析することにした。

再生：表3の1段に、13名の刺激人物の行動記述を被験者が再生した総数、従って、正確なものも不正確なものも含まれているが、その平均値を、血液型×一貫性水準別に掲げる。分散分析の結果は、血液型にも [ $F(3, 168)=3.79$ ,  $p<.05$ ]、また、一貫性水準にも [ $F(2, 168)=8.22$ ,  $p<.01$ ]、更に、交互作用にも [ $F(6, 168)=6.97$ ,  $p<.01$ ]、有意差が認められた。そこで、より詳しく見るために、単純主効果を調べることにした。主要な点を示せば、4つの血液型を通して、また、純粹セットを除く一貫性水準に関して、有意差が認められた。だがしかし、数値の現われ方は、当初、予測していた通りとはいかず、かなり雑多なものとなっており、とりわけ、混合水準のA型 ( $M=4.53$ ) やO型 ( $M=4.73$ ) の項目再生数の多さ

が目立っている。B 型や AB 型の場合には、  
 純粋セット水準の項目再生数が他の 2 セットより多いけれども、これとて、歴然たると言うのは憚られる。

次に、表 3 の 2 段には、刺激人物の行動記述の正確な再生数を掲げた。ここでも、血液型 [ $F(3, 168)=7.49, p<.01$ ], 一貫性水準 [ $F(2, 168)=17.58, p<.01$ ], ならびに、交互作用 [ $F(6, 168)=4.94, p<.01$ ] に、やはり有意差が認められた。詳細を明らかにすべく、単純主効果の検定を実施した。まとめて述べれば、行動記述の一貫性水準が純粋セットと混合セットの場合、血液型間に差異が見出された。いずれのセットにおいても、A 型と O

表 3. プロトタイプ・アナリシス(1)

一貫性の水準	刺激人物のタイプ				
	A 型	B 型	O 型	AB 型	N 型
全再生項目数					
純粋セット	3.40	3.53	3.33	3.47	2.83
混合セット	4.53	2.87	4.73	3.27	
不斉合セット	2.73	3.80	3.33	2.60	
正確な再生項目数					
純粋セット	3.07	2.80	2.53	2.27	2.80
混合セット	4.33	1.93	4.33	2.93	
不斉合セット	2.20	2.13	2.33	1.93	
全印象項目数					
純粋セット	2.33	1.67	2.73	2.27	
混合セット	3.27	2.00	2.27	1.80	
不斉合セット	1.93	1.73	2.47	1.80	
合致した印象項目数					
純粋セット	1.20	.67	.80	.47	
混合セット	1.27	.60	.87	.20	
不斉合セット	.60	.60	1.27	.67	

型の刺激人物の項目がより多く再生されていた。加えて、不斉合のセットは、他の 2 つのセットと較べて、正確な再生項目数が少なく、B 型刺激人物の場合を除いて、有意差が認められた。こちらでも、混合水準の A 型と O 型の項目再生数（いずれも、 $M=4.33$ ）の多さが着目される。のちにも考察するが、これら刺激人物は、2 群に分けた被験者それぞれの突端に呈示したものであり、従って、順序効果の要因も介在していると推察できる。

印象：表 3 の 3 段に、各々の刺激人物に対して抱かれた全印象材料の平均値を掲げる。一貫性の水準に差異はなく [ $F(2, 168)=1.21, ns$ ], ただ、血液型間に少し違いが見られるようであった [ $F(3, 168)=3.61, p<.05$ ]。その拠ってきたところは、混合セットの A 型における印象項目数の多さ ( $M=3.27$ ) に求めることができよう。表 3 の 4 段には、正確なというか、各々の血液型の特徴と合致する印象材料のみを抜き出した数値を示してある。この傾向は、全ての印象材料の結果と類似したものであった。

判定：刺激人物の印象を形成するさいに、血液型を考慮したか否かを尋ねたが、全被験者における肯定反応の割合は、43.3% (14/30) であった。次に、各々の人物の血液型を判定して貰ったのであるが、実験者が想定した通りの判定を正解と看做し、 $\chi^2$  検定を施してみたところ、12名の血液型別刺激人物のうち、4 名しか適合的に判断されていなかった。そのなかで、最も判然とした傾向は、A 型刺激人物の場合であった [純粋セットで 80% (12/15), 混合セットで 87% (13/15)]。

ところで、これまで検討してきた発見結果は、必ずしもすっきりしたものではなかった。たとえば、混合水準の A 型と O 型の刺激人物において、全ての、ならびに、正確な再生数が優れて多く見受けられたが、これは、2 群の被験者双方に、最初に呈示された人物であった故でもあろうし、使用した顔写真が同一女性であった故でもあろう。この写真は優れて鮮明なイメージを持ち、記銘と再生、更に印象形成に強力な作用を及ぼしたと推察される。そこで、かか



る研究方法の不備を補って、改めて、リサーチを実施することにした。



## 目的

前回のリサーチの不備要因、たとえば、順序効果や写真の作用、行動記述文の長短、被験者の心身の疲労などを、可能なかぎり取り除いて、暗黙裡の血液型性格観におけるプロトタイプらしさの程度が、自由再生や印象の形成に及ぼす影響を明確にしようというのが、今回のリサーチの目的ということになる。

## 方法

**被験者** 社会学に関する語学ゼミを履修している女子学生27名。

**刺激材料と質問紙** 刺激人物を特徴づける行動記述文は、前回と内容は同じながら、文の長さを全て一行に収まるように心掛けた。そのために、具体性を盛り込んだ状況記述は割愛せざるを得ないこともあった。記述文の修正例を示せば、(A)カフェバーでウェイトレスがかたづけやすいようにして、店を出た、(B)図書館で係の人に言いたいだけ言って、後はケロッとしていた、(O)ボーイフレンドとの待ち合わせに遅れそうになってバタバタ走っていった、のごとくである。なお、刺激人物ひとり当たり6文で表示することや、配列の仕方などは、前の通りであった。中性的な人物は、この際は削除した。また、前述の理由により、写真を使用せず、人物名を四角い枠で囲んで表わすのみに留めた。

記入用紙のほうは、再生の欄に工夫を施し、書く内容が6項目あることを明示するために、一行にひとつ点を冒頭に打ちつけた。最終頁では、刺激人物の血液型判定と並んで、「あなたは、他の人を判断する時に、血液型は何かということを考えますか」と質問し、4段階で評定して貰うことに直した。

**手続** 記憶容量や順序効果を配慮して、各人あての刺激人物の数を、今回は、4名に限定した。そのため、被験者を3群に分割することにした。まず、基礎資料の収集と称して、血液型と性格の関連性への関心をそれとなく喚起したのち、各々の刺激人物について、1回目60秒、2回目30秒ずつ、計6分の熟読を促した。引き続いて、記入作業に移ったが、補足記入の時間を含めても、所要は約20分で済んだ。

## 結果と考察

被験者を3群に分割し、各群に4名ずつの刺激人物を無作為に割り当て、再生ならびに印象の記述を求めたのであるからには、まず、3群の母集団間に相違はないという操作のチェックをすべきであろう。しかし、前回の結果で、この点は保証済であると看做し、ここでは手順を省略し、すぐ分析に取り組むこととした。

再生：表4の1段に、12名の刺激人物について再生された全項目数の平均値を掲げる。分散分析をすると、交互作用のみが認められ [ $F(6, 96)=2.26, p<.05$ ]、従って、単純主効果の検討へと移った。すると、A型での一貫性水準間に著しい有意差が見出され [ $F(2, 96)=5.45, p<.01$ ]、ここに記述量の差があり、純粹セット>混合セット>不斉合セット、のごと

くなっていると見受けられる。

同じ表の2段には、行動記述の正確な平均再生数を掲げてあるけれども、ここには、先程と類似した傾向が見られ、やはり、A型における一貫性水準間に、正確な記述量の差異のあることは明らかであった [ $F(2, 96)=8.17, p<.01$ ]。なお、血液型間には、この点に関して、全く相違のないことも確かめられた [ $F(3, 96)=0.53, ns$ ]。

印象：被験者によって記述された全ての印象項目、その平均値が表4の3段に掲げてある。分散分析の結果は、一貫性の水準間に差異のあることを示していた [ $F(2, 96)=3.64, p<.05$ ]。仔細に調べれば、A型の場合 [ $F(2,$

$96)=4.39, p<.05$ ]、ならびに、O型の場合 [ $F(2, 96)=4.51, p<.05$ ] に、単純主効果が有意となり、この2つの血液型において、一貫性水準による印象項目数に違いのあることが確かめられた。このことは、いずれも、純粋セットが呈示されたときに、より多くの印象項目が記述されたことを物語っている。

表4の4段には、被験者が記述した印象項目のなかで、当該血液型の特徴的な行動と合致すると、実験者によって判断された項目の平均数を掲げてある。一貫性水準間に明白な差異があり [ $F(2, 96)=7.62, p<.01$ ]、この点は、A型 [ $F(3, 96)=3.75, p<.05$ ] と、B型 [ $F(2, 96)=5.20, p<.01$ ] と、O型 [ $F(2, 96)=4.80, p<.05$ ] で、純粋セットの呈示が、より多くの印象記述を生んだことを示している。

この段階で、印象記述のうち、刺激材料のなかにはなく、被験者が創作して付加した血液型に関連する記述を、新しい材料として集計してみた。すると、純粋セット ( $M=.78$ ) の場合に、他と比較して (混合セット,  $M=.25$ ; 不斉合セット,  $M=.42$ )、その数がやや多く、刺激人物の輪郭が幾分はつきりしていた故であろうと推察される。

判定：人物の判断をするとき血液型を考慮するかと尋ねたところ、「かなり考える」が19%、「少し考える」が56%、「あまり考えない」が19%、「ほとんど考えない」が7%であり、ここには、控え目にも、少しは考慮せざるを得ない事態が浮び上がっている。また、12名の刺激人物の血液型判定では、3名しか適合的に判断されてはいなかった。そのなかでは、前回と同様、A型刺激人物が最も明瞭に判断されていた [純粋セットで100% (9/9), 混合セットで89% (8/9)]。

今回の結果をまとめれば、まず、再生に関して、一貫性水準による再生項目数に相違が見受けられ、この点は、とくにA型刺激人物の場合に顕著だと言うことができる。即ち、ここでは、純粋セット>混合セット>不斉合セットの順に、全記述数ならびに正確な記述数ともに、再生率が高くなる傾向が認められた。

表4. プロトタイプ・アナリシス(2)

一貫性の水準	刺激人物のタイプ			
	A型	B型	O型	AB型
全再生項目数				
純粋セット	4.78	3.56	3.89	3.44
混合セット	3.89	3.67	3.56	4.44
不斉合セット	2.89	3.11	4.22	3.33
正確な再生項目数				
純粋セット	4.67	3.56	3.44	3.44
混合セット	3.33	3.00	2.78	4.11
不斉合セット	2.22	3.00	3.56	3.22
全印象項目数				
純粋セット	2.67	1.78	2.22	1.33
混合セット	2.11	1.56	.89	1.67
不斉合セット	1.33	1.33	1.78	1.22
合致した印象項目数				
純粋セット	1.22	1.33	1.33	.33
混合セット	.56	.22	.33	.67
不斉合セット	.56	.56	.44	.33

印象に関しても、大体、同様の傾向が見られ、一貫性水準の違いが記述項目数の違いとして出現していたようであり、この点は、殊に A 型刺激人物に明瞭であった。このことから、純粹なというか、プロトタイプの刺激ほど、より鋭く、深く刻印され、従って、印象の統合も容易になされると、考察することができよう。

また、血液型間では、A 型の刺激人物が、再生ならびに印象記述ともに、優れて鮮明であるらしく、後れて、O 型と B 型が続き、AB 型はそのイメージが最も不明確にしか捉えられていない人物のようである。血液型別性格のプロトタイプカリティーが、なかなか判然としていないとも言え<sup>9</sup>、範疇間の境界が、たとえば、外向性と内向性のごとく対極的位置にある属性次元と較べれば、曖昧であることは間違いなく、ために、複数タイプに併属すると判断しうる行動記述が随所に存在するのである。この意味で、暗黙裡の血液型性格観は、現時点では、個人ごとの受け止め方の深さや広さに関して、バリエーションが大きいと看做さざるを得ないのである。

## 研究 4：ハイポセシス・テストング

### 目的

今度は、暗黙裡の血液型性格観を、仮説検証過程 (hypotheses testing processes) という視角から探究していくことにする。

我々は、それまでの社会的相互作用の経験や、多方面からの諸種の知識に基づいて、個々の人物や人物群について、かなり構造化され、分節化された概念、言うなれば、ステレオタイプを持ち合わせている。この、以前に獲得した知識 (事前の信念や仮説) を携えて、我々は社会的場裡に臨む。そして、その場で提供される、相手や他者についての新たな情報とかデータ、この妥当性を、件の人物について予て形成した命題や仮説に照らして、吟味しようと企てるであろう。その結果、その情報は、付加価値を有しないと放置されることもあろうし、無関係だと棄却されることもあろうし、また、時には、従来の意見 (先入見) を、何程か修正もしくは変更せざるを得ないという事態も生じることであろう。いずれにしろ、事前の知識は積極的に活用されるのである。

このようにして、ある種の性格タイプや職業や集団などに関して、我々は、プロトタイプ的な構成概念を用意して持っているのである。これらの構成概念は、スキーマ (schemata, Fiske & Taylor, 1984 参照) と呼ばれもするが、広く、情報の円滑な処理のために、狭くは、比較対照のための一般の基準として役立てられるものである。既述のごとく、今日では、暗黙裡の血液型性格観も、少なからず、そのように看做されてよい状態に到っているようだ。

たとえば、成功した企業主、好成績の保検外交員や自動車販売員などのことを頭に描けば、O 型のイメージと、直ちにではないにしろ、かつまた、個人差は相当存在するにせよ、結びつけがちであろう。更に、冒頭の例 4、亜季子が司書の資格を取ろうとしているのを耳にすると、O 型の彼女が、その職業にまつわる A 型イメージと合致するか否か、それまで貯えてきたライブラリーのなかから、証拠探しを企てることであろう。あるいは、この事例のように、

即座に疑問視してかかることもあろう。

それはともかく、このライブラリーの利用方略として、Snyder & Cantor (1979) は、3種類あることを指摘した。第1は、確認的方略 (confirmatory strategy) で、仮説を検証する際に、専ら、確認事項を関連ありとして想起してくる仕方である。そうして、数多くの仮説検証的な特性や行動を挙げることができれば、仮説は採択されることになる。第2は、非確認的方略 (disconfirmatory strategy) で、非確認事項を関連ありと看做す仕方であり、しかるのち、仮説を棄却しようと意図されている。第3は、均等機会方略 (equal opportunity strategy) で、確認事項と非確認事項を、仮説検証には共に等しく関連ありとする仕方であり、同じ時間と労力を投資して双方の事項を呼集し、仮説の採択か棄却かを吟味していくものである。

果たして、いずれの方略を、個々人は選好して使用するのであろうか。社会的行動に関する概観 (Snyder, 1984 ; Snyder & Gangestad, 1981) によれば、確認的方略が概して支持されている。即ち、仮説確認的事項のほうがより関連があって重要だ (relevant) と看做され、そういった証拠が選択的に貯蔵され、想起される傾向が見出されている。また、自己についての知識の獲得や維持に関しても、同様のメカニズムの働くことは、既に指摘したところである (中里, 1983, なお, Swann, 1983, 1985参照)。

そこで、他者に関する仮説を検証するために、3つの方略のどれが優先的に使用されるかを、暗黙裡の血液型性格観を素材として、検討していこうというのが、研究4のささやかな目的である。

## 方法

**被験者** 心理学に関する語学ゼミを履修している女子学生24名。

**刺激材料と質問紙** まず、被験者に呈示するための刺激材料、即ち、さくらと名づけた女子大生が過ごした一週間の生活や行動を、物語風に2頁にわたって書いた「資料」を作成した。その概略を述べれば、女子大生を取り巻いているであろう様々な状況、たとえば、自宅でのレコード鑑賞、図書館での勉強、レポート作成、テニスのミーティング、歯科医院通い、書店での買い物、スーパーでのアルバイトなど、記憶に留めやすいように、かなり具体的な事項を交えて、行動の描写をおこなった。しかも、O型的にもA型的にも、時と場合に応じて振舞っているように、双方の行動記述を実質的に等しい量に揃えるべく配慮した。研究3で使用した材料、ならびに、以前実施したリサーチのファイル<sup>10</sup>のなかから、適切な記述文を採用し、これに肉付けを施していったのである。

O型的行動の例としては――

- ・昼休みに、テニス同好会のミーティングがあり、合宿の練習方法について問題が起ったが、積極的に取り組んで意見をまとめた
- ・地下鉄のなかで痴漢にあったが、「何すんのよ」と大声をあげた
- ・英米文学の授業中、何度も活発に先生に質問した

また、A型的行動の例としては――

- ・夕食ののち、近所の家庭教師先で、子供が理解するまで、完璧に教えようと努力し

た

- ・ナビオ阪急のいつもの店で、ブラウスを慎重に品定めして買った
- ・3時から、梅田ターミナルビル7階の辻クッキングスクールに料理を習いに行った。  
エビの背わたを、端から端までいねいにとり、サラダの盛りつけにも気をつかって、きれいに仕上げた

このような文を、全部で24項目作成した。内訳は、想定上のことではあるが、O型的ならばにA型的記述が各々10項目ずつ、中立的な、つなぎのための記述が4項目ばかり用意してあった。この「資料」<sup>11</sup>に、「次の文章は、女子大生さくら〔21歳、4回生、O(A)型〕の、1週間の行動の断片を綴ったものです。よく読んで記憶し、印象を形成して下さい、4分後に集めます」という説明文を付けた。この前書きにも、刺激人物がO型かA型である旨を記してあったが、この点をより明示的にするために、本文のなかにも、「友達のきくから、O(A)型の典型だと言われた」という一項を含めておいた。それ故、O型資料とA型資料の2種類を用意してあったことになる。

この「資料」の証拠のライブラリーを呈示し、回収したのち、被験者に半びらの用紙を配布した。そこに載せた文章は、いま、女子大生さくら〔21歳、4回生、O(A)型〕は、不動産販売員と図書館司書のいずれかの職業を選択するように迫られている、そこで、さくらについて習得した情報に基づいて、あなたならどう判断するか、考えをまとめてください、というものであった。

ここに、さくらの選択状況の課題として持ち出した職業である、不動産販売員と図書館司書というのは、各々、典型的にO型の、また、A型の個人的属性が要求されるものと想定されていた<sup>12</sup>。被験者に読んで貰った「資料」の中味は、双方のいずれの職業にも、さくらが適合しているとの判断を下し得るだけの内容を十分に備えていた。だから、仮説検証のために、確証の方略も、また、非確証の方略も、はたまた、均等機会方略をも、利用することが可能であったとすることができる。

続いて配布した「記入用紙」の(a)は、さくらの職業適合性を判断するのに重視され関連ありと看做された事柄を、箇条書きに記して貰う設問であった。次頁の(b)は、不動産販売員の仕事に対する適合度、(c)は、図書館司書の仕事に対する適合度を、それぞれ、11段階で評定し、最後の(d)は、さくらの印象を自由に記述して貰うものであった。

**手続** 教室の真ん中の通路を境にして、左右に分かれて座っている参加者を、O型仮説条件(N=12)とA型仮説条件(N=12)に、それとなく割り振った。用紙の上方に小さく赤と青のマジックで区別された2種類の「資料」(違っているところは、O型とA型記述の入れ替えだけである)を、先に配布し、4分間熟読して貰ったのち回収した。その後、選択事態を記した半びらの用紙に続いて、「記入用紙」を、1人ずつに手渡していった。こうして、さくらの職業適合性を判断するのに関連ある事項をまず書いて貰い、次に、2つの職業に対する適合度を評定するように求めたのであって、この逆の順序ではない。全員が10分以内に記入を終了していた。

## 結果と考察

仮想人物さくらの職業適合性を判断するのに重視し関連ありと看做された記入項目は、被験者24名全体で、総数194 ( $M=8.08$ ,  $SD=2.65$ ) の多きに及んだ。これら総項目を、2名のジャッジが、個々別々に、O型的かA型的かと分類していった。選別の基準は、当初、各々の文がいずれに想定されていたかに拘わらず、被験者の記述そのものを厳正に判定するということであった。こうして、O型的項目とA型的項目の数がかぞえられ、2名のジャッジ間の一致度は、前者に関しては $r=.91$ 、後者に関しては $r=.96$ であった。なお、両ジャッジが共にカウントしなかった記述項目30個は、分析から削除した<sup>13</sup>。

このようにして、O型仮説条件ならびにA型仮説条件それぞれに、正確な仮説確証項目数と仮説非確証項目数（2名のジャッジの平均値）を算出した。表5の上段に、その結果を掲げる。

事実項目を測度として分散分析を実施したところ、仮説のタイプ（O型条件とA型条件）と証拠のタイプ（仮説確証的項目と非確証的項目）の2要因いずれの主効果も有意ではなく、交互作用のみが認められた [ $F(1, 22)=4.57$ ,  $p<.05$ ]。より詳しく見るために、単純主効果を計算したところ、O型仮説条件において、仮説確証項目 ( $M=3.79$ ) は非確証項目 ( $M=2.38$ ) より有意に多く [ $F(1, 22)=4.79$ ,  $p<.05$ ]、かつ、非確証項目に関しては、A型仮説条件 ( $M=3.75$ ) よりも相当にその数が少なかった [ $F(1, 44)=5.82$ ,  $p<.05$ ]。まとめれば、O型仮説条件では、仮説を確証しないような項目が挙げられることは著しく少なかったと言い得る。従って、職業として図書館司書が使用されたA型仮説条件に関しては、仮説確証項目 ( $M=3.21$ ) が非確証項目より多く挙げられたかは判然としなくても [ $F(1, 22)=0.70$ ,  $ns$ ]、職業として不動産販売員が使用されたO型仮説条件においては、非確証項目よりも確証項目のほうが、より多く挙示されたことは確実である。

表5の下段には、さくらの各々の職業に対する適合性についての被験者の判断を掲げる。その判断値を測度として分散分析を実施したところ、仮説のタイプ（O型条件とA型条件）にはなく、判断のタイプ（対応した職業への適合性と対応しない職業への適合性）に有意差が見出され [ $F(1, 22)=9.82$ ,  $p<.01$ ]、かつ、交互作用も有意であった [ $F(1, 22)=6.70$ ,  $p<.05$ ]。

単純主効果を検討したところ、著しい傾向はO型仮説条件に見られ、ここでは、対応した職業（不動産販売員,  $M=4.46$ ）のほうが、対応しない職業（図書館司書,  $M=2.71$ ）よりも、仮想人物さくらに遙かに適合していると判断されていた [ $F(1, 22)=16.37$ ,  $p<.001$ ]。これに対して、A型仮説条件では、対応した職業と対応しない職業間で、判断された適合度に相違は全く見出されなかった [各々,  $M=3.88$ ,  $M=3.71$ ;  $F(1, 22)=0.15$ ,  $ns$ ]。なお、対応しない職業においては、A型仮説よりもO型仮説の条件で、有意に適合していないと看

表5. ハイポセシス・テストイン  
グ・アナリシス

	仮 説 条 件	
	O型	A型
証拠のタイプ		
仮説確証的	3.79	3.21
仮説非確証的	2.38	3.75
職業適合性判断		
対応する職業	4.46	3.88
対応しない職業	2.71	3.71

做されていた [ $F(1, 44)=6.65, p<.05$ ]。

先の証拠のタイプと職業適合性判断との関連を衝くために、A型ならびにO型仮説条件を通して、挙示された確証項目数と非確証項目数との差と、判断された対応した職業の適合度と対応しない職業の適合度の差とのあいだに、相関係数を算出したところ、相当高い正の関係が認められた [ $r(22)=.55, p<.01$ ]。それ故、確証項目をより多く挙げるほど、他の職業と較べて、対応した職業により適合していると判断されていたようである。

最後に、仮想人物さくらに対する印象の自由記述を被験者に求めているが、その内容を分析したところ、上述の傾向を裏付ける結果が見出された。即ち、記述の全体を2人のジャッジがO型的かA型的かを判断したところ、O型仮設条件では、印象がO型的なのは16名、A型的なのは4名、不明は2名であり、これに対して、A型仮設条件では、記述内容の印象がO型的なのは9名、A型的なのは11名、不明は4名ということになった<sup>14</sup>。両ジャッジの判断の合致度は、 $r=.96(23/24)$ であった。

さて、ここでの発見結果は必ずしも斉一的とは言えず、確定的な主張をするのが聊か躊躇されるが、しかし、大体の傾向は窮えるのではないかと思われる。A型のさくらの場合、これを図書館司書という職に対応させたのであるが、仮想人物についての記述のうち、A型的部分のみならず、O型的な部分も、職業適合性判断をする際、等しく関連があると看做された。対照的に、O型のさくら（記述の中味自体はA型のさくらと同一）の場合は、不動産販売員という職と対応させたが、こちらでは、仮想人物記述のうち、O型的部分が優先的に職業適合性判断に重要な係わりを持つと判断されていた。

この分化的判断は、やはり、O型とA型という血液型それぞれの、職業との認知的な結び付きや連合の深さと連繋しているごとく見える。従って、不動産販売員と図書館司書のいずれを選択するか、こういう場面に遭遇していると聞かされれば、当の人物がO型のさくらであるときには、連想が大きく豊かに膨らみ、不動産販売員を確証するような記述が、優先して浮び上がって来たのであろう。しかも、適合度も高く評価されたのであろう。これに対して、A型のさくらである場合には、期待の効果のききめがさほど実質的には働かず、ために、刺激材料としての文章そのものが前面に大きく出て来たのかも知れない。

とはいえ、何らかの核心的な属性、この場合は、都合3度も掲げ、注視を受けたであろう血液型が中心の手掛りとなって、カテゴリー群化が生じ、仮想人物さくらの全体の印象が体制化され、符号化・貯蔵・検索・再生がなされたのであろうと推察される。こうして、仮説を支持することに通じる事実証拠が、専ら、あるいは、優先的に報告されるに到り、当初の仮説は、受容されがちな自己確証的仮説 (self-confirming hypotheses, Snyder & Cantor, 1979, p. 342) に成り行くのではないかと考量される。ついでながら、暗黙裡の血液型性格観を受け入れている信念の程度も、事態を左右しかねない要因であることを、ここでは、僅かに触れておくことにしたい。

## 一般的考察

それでは、暗黙裡の血液型性格観について実施した、4つのリサーチの発見結果を、順次に概括し、これを、少しく敷衍して解釈していくことにしよう。研究1では、この性格観が、どの程度まで、ステレオタイプ（先入見）として受容されているか、ということに検討を加えた。ベイジアン・アナリシスによれば、我々の被験者（女子大生）には、暗黙裡の血液型性格観はかなり浸透していて、ステレオタイプ化しているようであった。従って、現象の蔓延さから推して、同世代の男女や、広く一般の人々にも、同様の指摘ができそうである。だが、かなり浸透しているとはいえ、たとえば、以前に、筆者が、アメリカ人に対するステレオタイプを研究したときの結果と較べれば（中里，1982），浸透の深化度という点では同列には論じられず、受け止め方の個人差の大きさが、そこここに覗いているようである。確信者（true believer）から懐疑論者（nonbeliever）に到るまで、実に、振幅が並々ならずと言うことができよう。かくて、「この情報は詳しく知っており、非常におもしろくて、役に立つし、価値があり、好きだから、日頃、判断の参考にしている」という人が一方におれば、他方、「血液型によって性格や行動に差異ができるとは思っていません。私は血液型占いなども信じていません」、と頑なに拒否する人もいるのが現実である<sup>15</sup>。

研究2では、他者のとる行動の原因には諸種のものがあろうが、観察者が何故かと考慮したとき、暗黙裡の血液型性格観は、どの程度、手掛りとして有用であり、利用されてもいるかということに検討を加えた。こういった場合、観察者（認知者）は、他者（行為者）の置かれている行動決定状況を見定め、決定に終結する過程を再構成しようと企てるであろう。そして、行為者の行動理解のために、原因と考えられる内的属性や状況要因を探索する訳だけれども、その際、当の行動が何かユニークな効果を産出するならば、それに着目し、原因を帰属させることによって、行為者の行動の説明づけは、一気に、確信を帯びて完了してしまうことになる。ところで、こうした原因帰属は、ベイズの定理の文度比（標徴比）に対応するとされる。文度比の値が高いほど、行為者の行動はユニークな効果と結合した特定の属性に依拠するのだと、観察者は益々信じていくというのである。こんな経緯が、リサーチによって、かなり妥当なものとして跡づけられたと言えよう。かくて、暗黙裡の血液型性格観に基づく原因帰属は、日常、なかなか盛んに行われ、説得力あるごとく受け入れられているようだ。たとえば、グループにまとまりがつかず、メンバーの1人が弾き出されたような格好になっている場合、「あのこ以外はみんなO型やねん」、と片付けられたりする。また、学生が「あの先生はAB型やから、私とは合わへん」と言う場合、何とはなく合わない感じが先にあり、その理由づけを探求して、あれでもない、これでもないと取捨選択し、実に納得のいく、収まりの良い根拠を見出し、そこに原因を帰属しているのかも知れない。更に、友達を指して、「あのこはB型だから、行動に一貫性がない」と言うのも、相手の行動のちゃらんぽらんさに悩まされたあげく、それは、唯一、B型のせいだと極め付けているのかも知れない。しかも、普通、人々はそういう極め付けという事柄にいちいち拘泥しないものである。行動に一貫性のない者の全てがB型でも



なかろうし、B型のなかにも一貫性のある行動を取る者のいることを、発言者本人も充分に承知していることであろう。とはいえ、このような筋道で思考を展開すれば、かなりの効力感を味わい保てることも確かである。

さて、観察者（認知者）は、他の人々一般を、何らかの性格型範疇へと分類していくための既存の概念を、記憶として貯えている。こういう概念としての暗黙裡の血液型性格観と、現実の生活場面で遭遇する特定の他者、その刺激特徴との相互作用の関係を、研究3では、直接的に問題として扱った。記憶表象としての性格のプロトタイプは、そのなかに様々な属性情報を含んでおり、入力した現下の情報が、これら基準と極めて類似しているとき、当の人物はその性格範疇型にプロトティピカルだと、確信を持って、速やかに、識別されることになる。しかも、一旦、こういう認知が成立すると、観察者は、その一般的なプロトタイプを利用して、一層突っ込んだ理解や推論を展開していく。そこで、刺激情報の典型性の程度に変異を持たせて、情報処理の過程に生じる効果を吟味しようと企図した。純粋・混合・不斉合の3水準で呈示した刺激人物に対する判断、即ち、行動記述文の再生と印象形成の結果は、次のごとくであった。純粋と不斉合水準のセット間には、全ての血液型を通して、殊にA型の場合に優れて、記述文の再生数に差異が認められた。純粋な、プロトティピカルな人物は、より充分に記憶され、かつ、再生されたと言することができる。同様に、印象項目数でも、この一貫性水準に差異が明白であり、純粋セットは、他の2つの水準のセットが呈示された場合よりも、より多くの記述を生んでいた。従って、プロトティピカルな刺激ほど、より容易に範疇化され、そこから、広範な印象を生み、安定した統合像の構成を促すと推察できよう。逆の面から見れば、不斉合の人物の体制化には、多大の労力を要するということになる。いずれにしろ、認知者の頭の中にある既存の知識と、刺激人物に関する情報の相互作用という説は、支持の方向にあったと看做すことができる。但し、血液型に基づく性格型範疇についての留意点は、故なきことではないが、範疇間の境界が、他の暗黙裡の性格観、たとえば、外向性と内向性という次元と比較すれば、未だ曖昧に受容されているように思われることである（対照には、Cantor & Mischel, 1977, 1979b 参照）かくて、他者の性格のプロトタイプらしき、典型性の程度には高中低いろいろある。従って、対人判断における、その効果には変異があり、認知者の持つ暗黙裡の血液型性格観に照らして、ぴったり判りやすい人もいれば、そうでない人もいるということになる。典型性の高い人物であれば、「ほんと（純粋）のA型ね」と実感されたりする。逆に、典型性の低い人物の場合には、たとえば、A型には、AAもあれば、AOという遺伝子を持つ人もあるという知識に基づいて、敢えて確認するでもなく、また時には、煎じ詰めることによって、「O型がかったA型ね」とか表現され、納得されてしまう。このことは矛盾なのであるが、そう見極めれば、殊更、頓着する必要はなくなってしまうのであろう。あるいは、沢山のなかに例外は付きものだと、軽く合点されているのもあろう。

研究4では、たとえば、O型の人物が、O型的と見込まれている職業とA型的と見込まれている職業のどちらに就こうか、と考えているのを耳にすれば、彼女に関する知識のライブラリーから、O型という先入のプロトタイプに確証的な証拠、または非確証的な証拠、はたま

た双方の証拠、いずれを優先的に導き出して来るのであろうかということに検討を加えた。リサーチの結果は、文句なしに明瞭なという訳には参らなかったが、それでも、確証的項目のほうが、より多く判断材料として関連ありと目され、しかも、そうした場合、血液型と性格の関連プロトタイプに対応する職業のほうが、より適合していると看做されていたのである。かくて、他者について何らかの仮説を立てたとき、当の人物が、様々な時と場合を取る諸々の行動のなかで、専ら、あるいは、選好して、仮説を支持するような行動に注目し、自らの仮説の妥当性を確固たるものにしようと、いわば、特定の「心証」を抱いて証拠集めをする、そんなメカニズムや心的作用が、認知者には何程か働くようである。

ところで、翻って考えてみるに、暗黙裡の血液型性格観（いわゆる、血液型人間学）は、「医学的根拠は、ゼロだと断言してよいと思います」（中原・富家、1985、p.308）と評されながらも、これほど盛行しているのには、それ相当の理由があるであろう。「マスコミが事件をつくる」式の事情が、まず第1に指摘できよう。加えて、日本人における「血液への信仰」が関係し、これは、殊に、女性にはより身近な事柄なのであろうか。また、ABO式の血液型分類が、2極分解型ほど単純明快でも、12分類ほど煩雑錯綜もしていないで、4つと割合に手頃な数であることも挙げられよう。更に、この性格観のO型の特徴が、ごく普通の人々にとっては、外向性の特徴と、A型の特徴が内向性の特徴と、甚だラフにはあるが、対応しているように見えること、これが大きいのではないかと推考される。外向性と内向性と言っても、専門の心理テストなどで扱われているものではなく、人々の頭の中に抱かれているイメージ（たとえば、Semin & Rosch, 1981, 即ち、より一般的で、社会的望ましきの点でさほど跛行的ではなさそうである）を、ここでは指示している。その意味で、O型とA型とが人口の約7割を占め、主流を形成し、B型とAB型は少数集団（minority groups）として位置づけられ、そうした役割を担っていると認知されているのではあるまいか。この辺りの問題は、なかなか検討の余地があると思われる。

さてまた、Bem (1972) によれば、人々は自己の内的属性の有りようを、自らの行動を観察することを通して取得する。この自己観察のほかに、自己と他者の比較や、他者からの判断や評価のフィードバックが、自己概念の獲得方法として挙げられる。こうして、自分はB型人間だと認知し、そういう確固たる自己概念を持てば、確証的な情報処理の過程が生起することであろう。そこで、他の人から、B型の特徴が「当たっていますか」と訊かれると、選択的であるところの、確証的な自己観察や他者比較やフィードバック受容に基づいて、「ええ、だいたい当たっているみたい」という返答をするのではないか。このことは、自己の周りの社会的世界を理解し、整序し、予測していこうとする個々人の強い欲求、別言すれば、自分の行動を自ら決定したいという欲求や、対処能力があると感じたい欲求、そういう内発的動機づけ（Deci, 1980参照）の発露である、と推察していくことができよう。このようにして、同じ血液型内や異質な血液型の成員間の相互比較が実行されることであろう。相互作用場裡では、通常、相手から、自己概念を確証してくれるようなフィードバックを引き出そうと企てられる。また、他者から、自己矛盾的なフィードバックを受け取ると、自己概念が脅やかされ、外界制

御感が危うくされる。そのために、自己確証的なフィードバックを益々獲得しようと画索されるのである。このように、一旦、獲得された自己概念は、次いで、その維持が企図されるに到る（詳しくは、中里，1983）。更に言えば、他者の性格をも、そういう視角（スキーマ）から眺める傾向も生じてくる（中里，1984；Markus, 1983）。この意味で、暗黙裡の血液型性格観は、認知者が、環境からの情報や刺激の沿水にさらわれないように、それらを適切に体制化し、理解する手助けとなっていることは確かだ。それは、実に精妙な psycho-logic として機能している。推し拡げて言えば、人間は、自らが構成した社会的世界に関する暗黙裡の心理学理論に依拠しつつ、それを「現実」だと看做しながら、しかも、そのことを余り意識せずに、日常場面での思考や行動を展開している訳なのである（Wegner & Vallacher, 1977）。

冒頭にも述べたごとく、筆者は、いわゆる「血液型人間学」の妥当性を質するという立場にはない。そうではなく、これを、暗黙裡の性格観の一種として捉え、認知社会心理学の俎上にのぼせて探究していくことに関心を抱いている。飽くまで、認知上を扱うわけで、それ故、暗黙裡の血液型性格観は優れた題材を提供してくれると言え、その研究は心理学的に有意義であると考えている。更に、もっと突き進んで、予言の、または、ステレオタイプの自己成就（Snyder, 1982）という視角から、この問題をも含めて、広く扱っていくことを望んでいる。とはいえ、まだ緒に就いたばかりのところ、多くを語る材料を持ち合わせていない。前途に課題は滞積しているが、徐々に歩を進めるしか仕方はない。

## 註

1. 研究3：プロトタイプのデータは、筆者の指導にかかる、吉田泰世の、神戸女学院大学文学部総合文化学科昭和59年度卒業論文「対人認知における印象形成——プロトタイプ理論について——」、と共有するものである。実施と整理段階での彼女の並々ならぬ御助力に、厚く謝意を表します。また、労多きリサーチに参加して戴いた方々に、心からお礼を申し上げます。
2. 全世界の人々、人類とも考えられるが、ごく普通の人々の頭の中では、全体はこのように捉えられているのではなかろうか。
3. ひとつは、183名の女子大生に、「血液型性格分析」に対するイメージと態度をSD法で調査したものであり、ふたつは、90名の女子大生に、血液型別の性格や行動上の顕著な特徴を、自由に記述して貰ったものである。
4. 因みに、後々の議論のために、3種のベイズ確率推定相互間の積率相関係数を算出してみると、表1の2列と3列間、即ち、 $p(\text{特性})$ と $p(\text{特性}|\text{O型})$ 間では、 $r = -.59 (p < .10, n = 10)$ 、また、2列と4列間、即ち、 $p(\text{特性})$ と $p(\text{O型}|\text{特性})$ 間では、 $r = -.49 (ns, n = 10)$ 、更に、3列と4列間、即ち、 $p(\text{特性}|\text{O型})$ と $p(\text{O型}|\text{特性})$ 間では、 $r = .95 (p < .001, n = 10)$ であった。事前確率（ベースレート）がらみの相関係数が、いずれも、負の値となっているのが目立つところだ。
5. 更に続ければ、「親分（姐御）肌の」と「マイペースの」（共に  $M = 5.16$ ）、「自己主張の強い」（ $M = 5.91$ ）が中間に位置し、「まわりに気を配る」（ $M = 6.34$ ）、「きちょうめんな」（ $M = 8.09$ ）、「二重人格の」（ $M = 8.38$ ）は、甚だしく典型的ではないO型特性だと考慮されているようである。なお、最も典型的な特性が最も高い数値を示すように変換したのち、その集団平均値を用いて計算した典型性順位づけチェックリスト測度と、標徴比測度との相関は  $r = .75 (p < .05, n = 10)$  であり、また、集団内確率測度との相関は  $r = .97 (p < .001, n = 10)$  であった。
6. もうひとつの状況は、「亜樹子は、ある会社に就職が内定していた。契約書に署名を求められた

とき、考えたすえ断り、別の第1志望の会社の試験を受けた。けれど、2次面接で落ちてしまった。宙に浮いた形になっている亜樹子のことを、知人たちは、「だって、あの人は……じゃない」と語りあった、というものである。基準属性は水瓶座であり、この他に、丑年・A型・ネアカ・マル金・内向的・真正直、の属性を使用した。

7. 註6のごとく、もうひとつの状況は血液型ではなく、星座（水瓶座）を基準属性としていた。しかし、状況の差異は、本来的には、さほど深甚な影響を与えるものではない筈である。別個にも分散分析を実施したが、両状況間の傾向に相違はなかった。但し、星座よりも血液型を基準属性として使用した場合のほうが、ここでの状況においてはあっても、より高い判断確率が示されたことを指摘しておこう。
8. 範疇プロトタイプの概観として、土居（1978）と伊藤（1980）が有用であった。更に一層突っ込んだ議論のためには、Rosch（1978）やSmith & Medin（1979, 1981）を参照。
9. このリサーチで使用した行動記述文は、4つの血液型それぞれに13項目ずつ、合計52個であったが、これらの項目を、血液型による性格分類についての知識を持っている10名の女性ジャッジに、A・B・O・AB いずれに属するか判断して貰った。そのあと、適合度の $\chi^2$ 検定に掛けてみると、5%水準で有意になった項目は、A型で12個、B型で5個、O型で5個（プラス2個が10%水準未満）、AB型で1個（プラス3個が10%水準未満）という結果になった。「血液型人間学」文献に依拠しつつ作成したのではあったが、ここに図らずも食い違いが露呈したようではある。翻って考えるに、この項目適切性が、刺激人物の行動記述文の再生や印象形成に干与していた可能性が拭い去れない。再考の余地がある。
10. 筆者の指導にかかる、古村章子の、神戸女学院大学文学部総合文化学科昭和56年度卒業論文：対人判断に関する研究——血液型をもとに——、のナレーティブを参考にした。なお、この際、森田明子の昭和59年度卒業論文：血液型と性格の関連性と信憑性、この存在も指摘しておきたい。
11. 「資料」の本文だけ（血液型記述部分を削除）を、5名の女性ジャッジによって、11段階で判定して貰ったところ、刺激人物は、ややO型的であり（ $M=6.20$ ,  $SD=1.30$ ）、かつ、ややA型的でもある（ $M=6.80$ ,  $SD=1.48$ ）と看做されていた。参考のために付すれば、O型条件の被験者10番：「女子大生として普通の生活を送っているようだが、実際、友達としていたならちょっと変り者タイプであろう。O型の典型であると言われているらしいが、私にはB型、AB型のように思える」。
12. 不動産販売員と図書館司書という職業は、実のところ、Snyder & Cantor（1979）が、基準性格型としての外向型と内向型に対応させて使用したものを準用している。以前の、註10：古村章子卒業論文では、それぞれ、販売と計理の仕事としてあったが、今回このように改めたのである。但し、O型条件の被験者11番：「不動産販売員というのは、女性の仕事として、あまり耳に入っていないような気がする」、という問題点がある。しかも、厳密には、両職業の血液型プロトタイプカリティの程度を一定にしなければならないであろう。考慮の余地を残している。
13. たとえば、「起床が遅かった」、「社会問題に関心が深い」、「パイの店ココリコへ行く」、「家庭教師のアルバイトをしている」など、これだけの記述では、O型的かA型的か不分明でしかない。
14. 例として、O型条件の被験者2番：「たいへんしっかりしていて自由な現代っ子。他人のことよりもまず自分中心という気もするけれど、こういう人がいると楽しいと思う」、A型条件の被験者3番：「きっちりしていて、何ごとにも強くまんべんなく興味をもち、仕上げるに重点をおく。積極的で、きちんと自分に課せられた課題をやりとげることがを使命として強く感じる」。
15. 註3の血液型基礎資料による。

## 引用文献

- Ajzen, I., & Fishbein, M. 1975 A Bayesian analysis of attribution processes. *Psychological Bulletin*, 82, 261-277.
- Ajzen, I., & Holmes, W. H. 1976 Uniqueness of behavioral effects in causal attribution. *Journal of Personality*, 44, 98-108.

- Anderson, J. R. 1980 *Cognitive psychology and its implications*. San Francisco, Cal : Freeman.
- Antaki, C. (Ed.), 1981 *The psychology of ordinary explanations of social behaviour*. London : Academic Press.
- Bem, D. J. 1972 Self-perception theory. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 6). New York : Academic Press.
- Cantor, N., & Mischel, W. 1977 Traits as prototypes : Effects on recognition memory. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 38-48.
- Cantor, N., & Mischel, W. 1979 a Prototypicality and personality : Effects on free recall and personality impressions. *Journal of Research in Personality*, **13**, 187-205.
- Cantor, N., & Mischel, W. 1979 b Prototypes in person perception. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 12). New York : Academic Press.
- Deci, E. L. 1980 *The psychology of self-determination*. Lexington, Mass : Heath.
- 土居道栄 1978 概念のプロトタイプ 奈良女子大学文学部研究年報, **22**, 111-135.
- Fiske, S. T., & Taylor, S. E. 1984 *Social Cognition*. Reading, Mass : Addison-Wesley.
- Forgas, J. P. (Ed.) 1981 *Social Cognition : Perspectives on everyday understanding*, London : Academic Press.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York : Wiley.
- 伊藤康児 1980 カテゴリーの研究——Roschを中心とする研究の概観——名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), **27**, 17-32.
- Jones, E. E., & Davis, K. E. 1965 From acts to dispositions : The attribution process in person perception. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 2). New York : Academic Press.
- MaCauley, C., Stitt, C. L., & Segal, M. 1980 Stereotyping : From prejudice to prediction. *Psychological Bulletin*, **87**, 195-208.
- Markus, H. 1983 Self-knowledge : An expanded view. *Journal of Personality*, **51**, 543-565.
- 南博 1983 日本の自我 岩波書店
- 宮城音弥 1982 性格と血液型 多湖輝 (編) 現代人の心理と行動事典 講談社
- 森本毅郎の「TBS 日曜ゴールデン特版」(編) 1985 血液型人間学のウソ 日本実業出版社
- 中原英臣・富家孝 1985 血液型人間学の嘘 文芸春秋, 1月号, 308-313.
- 中里浩明 1982 ステレオタイプの測度に関する研究 神戸女学院大学論集, **29** (2), 69-78.
- 中里浩明 1983 自己知識の獲得と維持 神戸女学院大学論集, **30** (2), 35-45.
- 中里浩明 1984 他者の性格判断に及ぼすセルフスキーマの影響 神戸女学院大学論集, **31** (2), 51-58.
- 中里浩明・Michael H. Bond・白石大介, 1976, 人格認知の次元性に関する研究 心理学研究, **47**, 139-148.
- 能見正比古 1981 血液型と性格ハンドブック サンケイ出版
- 能見正比古 1983 新・血液型人間学 角川書店
- 能見俊賢 1983-4 血液型おもしろ読本 (1・2・3) 文化創作出版
- 能見俊賢 1984 血液型これだけ知ったら嫌われる 青春出版社
- 大橋正夫 1984 対人関係の社会心理学 福村出版
- Phillips, L. D. 1973 *Bayesian statistics for social scientists*. London : Nelson.
- Rosch, E. 1978 Principles of categorization. In E. Rosch & B. B. Lloyd (Eds.), *Cognition and categorization*, Hillsdale, N. J. : Erlbaum.
- Schneider, D. J., Hastorf, A. H., Ellsworth, P. C. 1979 *Person perception* (2nd ed.). Reading, Mass : Addison-Wesley.
- Semin, G. R., & Rosch, E. 1981 Activation of bipolar prototypes in attribute inferences. *Journal of Experimental Social Psychology*, **17**, 472-484.
- 繁榊算男 1985 ベイズ統計入門 東京大学出版会

- Smith E. E., & Medin, D. L. 1979 Representation and processes of lexical concepts. Unpublished manuscript, Stanford University. Cited in N. Cantor, E. E. Smith, R. French, & J. Mezzich Psychiatric diagnosis as prototype categorization. *Journal of Abnormal Psychology*, **89**, 181-193.
- Smith, E. E., & Medin, D. L. 1981 *Categories and Concepts*. Cambridge, Mass : Harvard University Press.
- Snyder, M. 1982 Self-fulfilling stereotypes. *Psychology Today*, July, 60, 65, 67, 68.
- Snyder, M. 1984 When belief creates reality. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 18). New York : Academic Press.
- Snyder, M., & Cantor, N. 1979 Testing hypotheses about other people : The use of historical knowledge. *Journal of experimental social psychology*, **15**, 330-342.
- Snyder, M., & Gangstad, S. 1981 Hypothesis-testing processes. In J.H. Harvey, W. Ickes, & R. F. Kidd (Eds.), *New directions in attribution research* (Vol. 3). Hillsdale, N. J. : Erlbaum.
- Swann, W. B., Jr. 1983 Self-verification : Bringing social reality into harmony with the self. In J. Suls & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self* (Vol. 2). Hillsdale, N. J. : Erlbaum.
- Swann, W. B., Jr. 1985 The self as architect of social reality. In B. R. Schelenker (Ed.), *The self and social life*, New York : McGraw-Hill.
- Trope, Y., & Burnstein, E. 1975 Processing the information contained in another's behavior. *Journal of Experimental Social Psychology*, **11**, 439-458.
- Wegner, D. M., & Vallacher, R. R. 1977 *Implicit psychology : An introduction to social cognition*. New York : Oxford University Press.

原稿受理 1985年4月25日